

マボロシ少年の航海日 誌

ネメシスQ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんなキヤラがいたら面白いなーと思つてリハビリがてらに書いてみました。続く
かどうかは評判次第。

ちなみに主人公は戦いません。

タイトルに日誌とか入つてますが、別に日記形式ではないです。

ひとまず完結です。短っ！

2015年7月28日、気まぐれに第一章開始。超不定期更新なので、ご注意を。

2018年2月13日、第1章完結。第2章については未定。

目

次

序章

ぶろろーぐ

いち

に

さん

よん

えびろーぐ

第一章

Four

Three

Two

One

46

41

36

31

26

20

16

10

5

1

S
i
x
F
i
v
e

序章

ぶろろーぐ

拝啓、ばあちゃん

おれは今日初めて魚人と会いました。意外と人間と外見変わらないですね。色々話もしました。そして今、その魚人はものすごい形相でおれたちを追いかけております

まる

「ふむ、魚人つて陸上でも中々足速いのな。しかし、十傑集走りを極めたおれの走りには
ついて来れまい」

「確かに速いけどその走り方は一体何!? どうやつたら上半身ぶれずにそんなスピード
出せるのよ!? しかも足の動きは見えないし、なんか気持ち悪いわ!」

「努力のたまもの。そして気持ち悪いとは失敬な。この素敵走りは無駄に洗練された無
駄のない無駄な技術を結集したものだというのに、それが分からんとは……やはり年増
にはこのセンスが分からんらしい」

「殺すぞ」

「申し訳ありません」

隣を並走するノジコなるおねーさんからものすごい殺氣を向けられたので即座に訂正した。

それはともかく、魚人とのリアル鬼ごっこが始まってから、かれこれ十五分経つ。かなりしつこく追つてくるため、中々撒くことが出来ない。

これ以上やつても不毛なだけなので、その場でブレーキを掛け立ち止まる。

「追われるのも飽きてきたので、そろそろ吾輩の真の力を解放するとしよう。ノジコ、遺書の用意はできるか？」

「できてる訳あるか！ 真の力はどうした!? 勝算があるんじやなかつたの!?!」

「勝算などある訳ないだろう常考。おれ10歳児。戦闘能力皆無なおれが魚人に勝つなぞ逆立ちしても無理。でも逃げ切ることはできるよ！」

「どうやつて？」

「こうやつて。チンカラホイつと」

某青狸に登場した魔法の呪文を唱えると、あら不思議。今までおれたちを追いかけていた魚人が踵を返して帰っていくではありませんか。

「何……したの？」

「イリュージョン」

ドヤ顔で答えたなら頭をはたかれた。解せぬ。

「よく分かんないけど、とりあえず助かつたみたいね」

「ふつ、おれのおかげだな。感謝するがよいぞ」

「追いかけられたのもあんたのせいだけどね」

「そうだつけ？　おれのログには何もないが」

「とぼけんな。あんたが魚人をおちよくつたからこうなつたんでしょうが」

「そんなことより腹が減つたでござる。どつかに美味しい店ない？」

「人の話を聞かないガキンちよね。教えてもいいけど、あんた金持つてんの？」

「…………この世には宝払いという支払い方法が……」

「無錢飲食する気か！　はあ……こうなつたのも何かの縁だし、家に来な。一食ぐらい
は奢つてあげる」

「なんと、飯を恵んでくれるとは。感謝つ……圧倒的感謝つ……！　よっしゃ！　今夜
は飲み明かすぜ！」

「あんた未成年でしようが。酒は出しません」

「なん……だと……？」

「当たり前でしょ。ほら、行くわよ。着いてきなさい」

「承知」

そうして歩き出したノジコの後に続く。

「あ、そういえば……あなたの名前、まだ聞いてなかつたわね。何て言うの？」

「テンセー＝シャと申す。ちなみに偽名です。よろしく」

「自分から偽名だつてバラす奴なんて初めて見たわ……なんか事情があるんでしようし、深くは聞かないでおくわ。それでいいでしょ？」

「気づかい乙。しかし特に深い理由はないのだが」

「ないんかい！」

真っ昼間のココヤシ村にノジコのツツコミが響き渡った。

いち

ヒマすぐる→よろしい、ならば冒険だ↓
いくえ不明

「そんな訳でここに来ました」

「うん、よく分かつた。あんたの頭の悪さが」

失敬な。ノジコのおバカな子を見る目におれの怒りが有頂天。これは抗議せざるを得ない。出されたパスタをウマウマ頬張りながら文句をぶつけてみたが、

「たつたこれだけで経緯を把握しろって無茶すぎるでしょ。バカなの？ 死ぬの？」

容赦ないもの言いにおれの心は深い悲しみに包まれた。慰めを要求する。

「うるさい。で、本当のところはどうなの？」

要求は無視されたようだ。しかしこのままで話が進まないのも事実。仕方ない、ちゃんと話すとしよう。

「どうも何も言つた通りザマス。ヒマすぎてついつい知り合いの船に潜入。そのまま航海して辿り着いた島に上陸。一人で探検してたらそのまま置いてかれた。まあ、向こう

はおれが船に乗つてたこと知らなかつたから仕方ないけど。そこで適当に旅してたらこの村に着いた」

「あんた絶対ただの10歳児じやないでしょ……。じゃあ次、魚人に絡まれてた理由は？」

「この島から出る船がないことに気づいたので話を聞いていた次第。素敵な顔色ですね、刺身にして醤油かけたら美味しそうと褒め称えたところ、何故か怒り心頭に殴りかかってきた。襲われた理由がさっぱりんぐ」

「あたしはあんたの頭の悪さに脱帽した」

「顔をしかめながら頭を抱えるノジコ。

「頭痛か？ 鍛え方が足りんな未熟者め」

「あんたのせいだ、あんたの！」

「いつの間にか犯人にされていた。これが孔明の罠……！」

「あんたが何を言つているのかさっぱりわからない」

「おれも詳しくは知らぬ。知らないうちに口をついて出る模様。それより何で陸に魚人がいんの？」

「…………長い話になるよ」

「じゃあいいや。パスタお代わり」

無言でガツされた。

「聞きなさいよ。今のはこの島の過去を語る流れでしううが」

「暗すぎる過去話なんて誰得な話を聞いたところで、おれに出来ることは何もないし、興味もない。それよりもっとパスタ食いたい」

「あんたつて本当に……。はあ、ここまで図々しい子供も珍しい気がするわ」

「褒めんなよ」

「照れるなよ」

あれこれ言いながらもお代わりをよそってくれたので、お礼を言つて受け取り、食事を再開する。

そして数分後、空になつた皿の前で手を合わせる。

「ごっそさん。美味でござんした」

「お粗末様」

おれより先に食い終わつてたノジコが皿を下げる。

「片付け手伝うつてばよ。世話になりっぱなしで悪いし」

「そう？　じゃあお皿洗つといてくれる？　あたしはその間にみかんの収穫してくるか

ら

「お安いご用だつぜ！　街の皿洗い大会ベスト64の力を見せてやる」

「微妙な順位ね……」

若干不安そうにしながら籠を背負つて畑に出掛けしていくノジコ。どうやらある程度は信頼されている様子。

黙々と皿洗いすること数分、二人分しかないことも手伝つて早々に終わつてしまい、手持ち無沙汰になつてしまつた。

「仕方ない。島を散策するか」

「あんたはここで大人しくしてな」

島を散歩しようと w k t k しながら家を出ようとしたらノジコに止められた。
もうみかんの収穫終わつたのか？ 早くね？

「あんたが心配で様子見に一度中断したの。案の定だつたわね」

「そこまで心配されるとは……これはノジコにフラグが立つた模様。しかし、この歳の差はマズイ気が……モテる男はツラいぜ」

「意味は知らないけど不快なことを言つてるのはよく分かつたわ。それとあたしが心配してたのはあんたが何かしでかさないかどうかだつての」

グリグリ攻撃されたので撤回しておく。さすが嵐を呼ぶ5歳児をも黙らせる技。かなり痛かつたと明記しておく。

「あんだけ魚人を怒らせたんだ。今出てつたら何されるか分かんないでしようが」

「え～……じゃあ仕方ない。自宅警備員しながら天井の木目でも数える」

「なんて意味のない行動。てかここはあなたの自宅じゃないし。それよりヒマならみかんの収穫手伝ってくれない? すぐに切り上げてきたからまだ途中なのよ」

「いいだろう。では行こうか蜜柑王。籠の容量は十分か?」

「誰が蜜柑王か。あんた度々変な口調になるわよね」

「生まれた時からこうみたいです。それより収穫つてどーやんの?」

「見せてあげるからついてきなさい。余計なことするんじゃないよ」

「おれがいつ余計なことをした?」

「会った時からずつとしてるわね」

「マジか」

「マジよ」

初耳です。

随分と高性能な耳ね。

そんなこんなでみかん収穫して過ごしました まる

に

行く宛ないのでノジコの家に世話になることになった。

現在夕食中。シチュームかつ、です。

「ふーん。アーロン一味ねえ……」

とりあえず島の現状だけは聞いておいた。何やらこの島は8年前からアーロン一味という魚人の海賊団に支配されているらしい。

「海中に生息するくせにお金を要求するとかイミフ。店で食い物買うわけでもないのに何に使うんだろね」

「国を作ろうとしてんのさ。東の海をまるごと魚人の帝国にするつもりなんだ。奉公はそのための資金らしい」

「それこそ余計にわからん。魚人が人間を力で支配するのにお金は必要ないだろ。ぶつちやけそいつらの野望は夢物語。人間より圧倒的に数の劣る魚人が東の海を丸々支配するとかどう考えても無理ゲー。数の暴力はバカにならんよ」

「あんたは魚人の恐ろしさを知らないからそんなことを言えるのよ」

「かもしらんね。まあ、本気でまるごと支配を考えてるなら、奉公の使い道は十中八九海軍への賄賂か。手の回らない地域を支配、かつ本部に連絡がいかないようにするために金で支部を買収する心算にちまいない。海軍本部に来られたらさすがに魚人たちもたまたまんじやないだろうし」

「なつ……！」

「そもそも8年前から高額賞金首がうろついてると分かってる島に海軍が攻め込まない理由がないし、いくら本部が忙しいと言つても、視察に来た本部の船についてにアーロン捕らえろつて命令があつてもおかしくない。それがないつことはつまり、ここの海軍がアーロンからうまい汁啜つてるのは確定的に明らか」

「嘘でしょ……仮にも海軍がそんな事を……」

何やらショックを受けた様子のノジコだが、これくらいの事なら別のどこでもやつてる海軍はいる。しかし、どうするか。告げ口しようにも連絡手段がにい。さすがにお手上げ状態である。

「おろ？」

そうして、あれこれどうするか考えていたら、ふいに頭の中にいくつかの映像が浮かんで来た。

おお、久しぶりだな、これ……

「まあ、でも大丈夫じやね？ 麦わら帽子被つたゴム人間が助けてくれるつて」「何よそれ」

「や、たまーに見覚えのない光景がふつと頭に浮かぶんだよね。一種の未来予知？ それでキザつ鼻がぶつとばされるんの見た。ただし、今んとこの的中率は不明」

つい今しがた頭に浮かんだ光景をノジコに話す。多分ここでの出来事で間違いないはず。村で見かけた風車のおつさんがちらつと見えたし。

「…………ふつ、それ本気で言つてる？」

正直に言つたんだが、嘘だと思われたようだ。しかし先程より雰囲気は明るくなつた様子。

「そういうやあんた、家族は？ 心配してるんじゃないの？」

「ばあちゃんが一人いるが、大丈夫だと思う。おれがいなくなるのは割りと日常茶飯事だし」

「こんな孫を持つたおばあさんが氣の毒すぎる……まあ、あんたは危険な目に巻き込まれてもけろつとしてそだだから確かに心配は要らないのかもしれないけど……」「ん。何よりばあちゃん、おれのビブルカード持つてるから生死の確認はできる筈」「ビブルカード？」

「詳しくは知らんけど、持ち主の居場所の大まかな方角を教えてくれる不思議アイテム。

命の紙とかいう厨二な別名がついている。何故か持ち主が死にそうになると焦げるらしい」

「つまりそれがあれば安否は確認できるつて訳ね」

「そゆこと。てな訳で家族の心配はしなくてもよいかと」
ノジコも納得したようなのでこの話は打ち切り。シチューの残りをかつこむ。美味しうございました。

夕食を終え、食器も片付け終わるとすることがなくなる。

「元々ヒマ潰しのために家を出たというのに、出た先でヒマをもて余しているとはどういうことか」

「そんなにヒマなら寝れば?」

「その発想はなかつた。しかし食べてすぐ寝ると牛になるという呪いが……」

「太るだけでしょ」

太るのも嫌なのでまだ起きることにする。

結局ノジコとしばらく雑談した後、就寝した。久しぶりにフカフカのベッドで寝れたので朝までぐっすりでした。

「あつ」

「あつ」という間に一週間が過ぎた。何となく居心地がいいので住み着いてしまっている。まあ、この島から出る手段がないのもあるが。

さすがにいつまでもヒモでいるのは心苦しいので、魚を釣つて家計の足しにしている次第。

「どうだい、釣れてるかね？」

「んー？」

今日も今日とて、朝っぱらから崖に腰かけて釣糸を垂らしていると、ふいに声をかけられたので振り返る。

そこには最近仲良くなつた、警官帽に風車を刺したおつちゃんが。

「ゲンゾウのおつちゃんか。まあ、ボチボチかな」

「そうかい」

「おお。さつき魚人が釣れたんだけどな、不味そうだつたんでリリースした」

「ブーッ！」

先程釣つた大物の話をしてみたらおつちゃんが吹いた。きちやないな。

「なつ、なななな……つ」

「おっちゃんが壊れたようです。斜め四十五度で叩けば直るやも」
「壊れないわつ！」

どうやら叩く前に復活した模様。で、どしたん？

「いや、ノジコの奴に頼まれてな。ほれ、差し入れだ。朝食も食べずにここに来たのだろう？」

「あ、忘れてた。感謝感激雨あられ。お礼に魚人の釣り方を教えてしんぜよう」

「そんな心臓に悪い釣り技術はいらんよ。それにしても、ノジコの言つた通り本当に変な子供だな、お前は」

「ふつ、照れるぜ」

「誉めてないのだが」

結局おっちゃんは差し入れを届けに来ただけのようで、すぐに帰つていった。おれは帰つてもヒマなだけなので、籠の容量が一杯になるまでは続けることにする。そういううちに釣竿に反応が。

「おつ、かかつたかかつた。今度は何が釣れるやら」

一気に引き上げる。

牛が釣れた。

ココヤシ村は今日もいい天氣である。

さん

16 さん

「誰よあんた」

「そちらこそ、どちら様で候」

釣りから帰つて来たが、ノジコはみかんの収穫のためにいなかつたので、一人寂しくズンドコ節を熱唱していたところ、オレンジ髪の女がノックもなく入り込んできた。しかもかなり機嫌が悪いと見える。

「こゝ、あたしん家なんだけど」

「把握。なるほど、あなたがベルメールさんですね、お邪魔します。しかしさか化けて出るとは。これはノジコに知らせてやらねば」

「誰が幽霊か！ 私はナミよ！ ベルメールさんの事まで聞いてんのなら予想つくでしょ！」

「あいにくだが、おれの口グには何もない。おれからすれば空き巣に入った怪しい人物でしかない。シチユから見て襲われるのは明らかにおれ。お巡りさん、こいつです」「私からしたらあんたの方がよっぽど怪しいんだけど!?」

「そうカツカすんなつて。体に悪いぞ？」

「あんたのせいでしょうが！　ああ、イライラする……何でこの私がこんな奴に振り回されてるのよ……」

「坊やだからさ」

「あんたの方がガキでしょ！」

「そう言う奴ほど中身がガキなのがテンプレ。ほれ、飴ちゃんあげようか？」

「子供に殺意を覚えたのはこれが初めてだわ……」

殺されるのは勘弁なのでローリング土下座で謝罪する。怒りは収まつたようだが、おれのローリング土下座が引かれていたのは何故だ。

「あらナミ。あんた帰つてきてたの？」

「ノジコ……」

落ち着いたところでノジコが帰宅。みかんの収穫が一段落して戻つてきたとのこと。
「で、結局こいつ誰なの？」

少し落ち着いたところで改めてナミがノジコに尋ねた。

「ちよつと前に魚人に追われてたところを拾つたのよ。名前は……何だつたつけ
「知らないの!?」

「本名を教えた覚えはないな」

「特に必要性も感じなかつたしねえ」

ハハハ、と笑い合つておれたちに、ナミはついていけねえとばかりに頭を抱えて蹲る。

「そんな訳で、ちよつと前からこの家でお世話になつてます、モブ太です。よろしく」

「モブ太？ 変な名前ね」

「それ偽名でしょ」

「よく分かつたな」

ナミは偽名に気づいてなかつたが、ノジコは普通に見破つてた。おのれ、腕をあげたなノジコ。そしてナミは青筋を立てている。短気なやつちや。

「毎日あんたの相手してれば嫌でも分かるわよ」

「なるほど、おれの言動に慣れてきたと。ならばもつとはつちやけても構いませんねつ」「構うわドアホ。これ以上はさすがに対応しきれんわ」

「はつ、それくらいで音を上げるとは。Y o u s t i l l h a v e l o t s m
o r e t o w o r k o n (まだまだだね)」

「生意気なことを言うのはこの口か」

ほつペを縦縦横横に引っ張られた。痛いでござる。てかよく伸びるなおれの頬。それを呆れた様子で見つめるナミ。

「ずいぶん仲良いわね……」

「そう？ まあ確かにこいつが来てから退屈はしてないけどね」「おれはわりと暇してるけど。でもこここの食事に餌付けされて離れられないでござる。あ、メシと言えば忘れてた。ノジコ、これさつき釣つてきたやつ」

お仕置きから逃れ、バケツに入つた本日の戦果をノジコに渡す。

「へえ、結構釣つてきたじやない。あんた釣りの才能あるかもね」「中々釣れる穴場見つけた。ただ、少し惜しいの逃がしたんだよな。海で釣れる牛なんて珍しかったのに」

「牛？」

「なんかでつかい牛が釣れたんだ。鼻に輪つかあつたから誰かのペツトだと思つてそのまま泣く泣くりリースしたけど」

「それ……アーロンとこの海牛のモームじや……」

「何ですと!? それならおれが食つちまつても誰も文句言わないよな？ よし、早速釣つてくるつぜ！ 今夜はステーキだ！」

「やめい！」

釣竿片手に張り切つて出かけようとしたらノジコとナミに揃つて止められた。解せぬ。

よん

よくわからんが、有限会社アーロン商事が倒産したらしい。なんでも多額の借金を抱えていて、借金の取り立て屋に会社を物理的に潰されたのだとか。取り立て屋スゲー。それにともない、巻き上げられていた地上げ料も帰つてきたらしい。ふむ、ハツピー エンドつてやつですな。

みなさん大喜びで宴を開き、どんちゃん騒ぎをくり広げています。

「そして現在、時刻は0時。夜中になつてもまだ宴はヒートアップしていつています」

「誰に説明してんのよ」

「三次元の方々」

「？」

ノジコが訝わからんといつた顔をしている。当然だな、おれも口をついて出ただけで意味はわからんし。

「それじゃ、少し盛り上げてきますか。見よ、おれの一発芸！ アーロンのものまね！」
「やめんか！」

ノジコにはたかれた。実に痛い。

「よく考えたらおれ、実物のアーロン見たことなかつたわ」

「ああ、そういうえば昼の騒ぎにもいなかつたもんね、あんた」

「知らない間に全部終わつて悔しかつたとです」

「あんたがあの場にいたら絶対ロクな事にならなかつただろうし、むしろ助かつたわ」

「失敬な！ いくらおれでもＴＰＯはわきまえているぞ！」

「じゃあ魚人が倒れてたら？」

「魚拓取る」

「それ見たことか」

「くそつ、ノジコめ！ こんな屈辱は初めてだ！」

閑話休題

「そろそろノジコと話すのも飽きてきたんで、ゲンゾウのおっちゃんでもからかつてるわ」

「はいはい、いつてらつしやい」

「なつ、ノジコがツツコまない……だと？ どうしたノジコ、病気か？」

「あんたにいちいちツツコんでたらこつちの氣力が持たないつてようやく気づいたのよ」

「なん……だと……」

「いや、何でそんなショック受けてるのよ」

「……そつ……か。そう、だよな……おれ、ノジコに迷惑かけてたよな……おれのせいでノジコに負担がかかるなら、おれは……」

とぼとぼと肩を落とし、ノジコから離れる、離れる、離れる……ちらつ、

「いや、バレバレだから」

「ですよねー」

さすがノジコ。同情を誘う作戦は通じなかつたようだ。

「つたく、心にもないことを」

「ふひひ、サーเซン」

「気持ち悪いからその笑い方やめなさい」

「ノジコの辛辣さに全おれが泣いた」

悲しかつたのでふて寝した。嘘です。もう夜遅かつたのでフツーに寝ました。
おれ10歳児。さすがに睡魔には勝てません。ぐー。

その後幾日かが過ぎ、麦わらさんたちの出発の朝がやつて來た。

村人たちは総出で麦わらさんたちの見送りに来ている。

話を聞くに、当のナミは今まで盗んできた1億を村に置いてくらしい。ならおれにくれ、と言つてみたが、返つてきたのは拳骨だつた。

そろそろ出港の時間が迫つてくる。遅いな、と麦わらさんたちがぼやいていると、ようやくナミが姿を表した。おれたちの後方、船から一直線上にある道の上。

「船を出して！」

「えつ、第一声がそれ？」

おれのツツコミはむなしく宙に消え、ナミは全速力で船に向かつてダッショウする。

麦わらさんたちは戸惑いながらも錨を上げて、帆を張り、船を出す。

お礼参り……間違えた、お礼も言わせずに立ち去るなど許さんとおつちやんらがナミを止めようとすると、するするとスつていきながらナミはおつちやんバリケードを抜け、船に向かつてアイキヤンフライ！

見事に着地したナミは、懐からバサバサと財布を甲板に落とす。

「みんな、元気でね♥」

「や、やりやがつたあのガキヤーーッ!!」

諭吉……あ、違つた、一万ベリ一 片手に笑うナミに、おつちやんらの怒りが有頂天。ノジコもさり気に盗られていた模様。

みんなナミに向かって怒鳴り付けるも、徐々に内容が変化していく。

「いつでも帰つてこいコラア！」

「元氣でやれよ！」

「お前ら感謝してるぞオ！」
ではおれも一言。

「バルス！」

「そんな物騒な単語叫ぶな！」

ノジコにしばかれた。

そして一通り叫び終わると、みんなして地面に座り込む。なんだかんだ言つて楽しく別れたようだ。

「んじや、そろそろおれも帰りますわ」

「…………」

言うと同時におれの体が透けていく。村のみんながざわめきだすが、ノジコが手で制すると、即座に静まつた。

「行くんだね」

「まあ、そろそろ帰ないと、ばーちゃんに迷惑かかるしな。楽しかったぜ」「こつちは気の休まる暇もなかつたよ」

「H A H A H A！ 子供ができたらそんなもんだ。ノジコも早くいい人見つけないと嫁き遅れるぞ」

「余計なお世話だよ！」

そろそろ時間だな。

「んじや、また遊びに来るわ」

「……………いつでも待ってる。楽しくやれよ、バカ弟」

「！ おう！」

そして、おれは自身の体を消した。

えびろーぐ

「ふう……」

宣言通り、あいつは文字通り、あたしたちの前から消えた。事前に聞いてはいたけど、本当デタラメよね。

「ノ、ノジコ……今のは一体……」

「いきなり消えちまつたぞ！」

「まさか、幽霊か何かか!?」

何が起こつたか理解できていないゲンさんたちがざわめきたつ。ま、それも仕方ないけど。

「違うわよ。あの子は人間。ちょっと手品ができるだけの、ね。今ごろは海の上よ」

「しかし、あれは手品なんてレベルじゃ……」

「悪魔の実の能力らしいわよ。詳しくは知らないけど」

「あ、あの子も能力者だつたのか！」

「そういうこと」

麦わらといい、あいつといい、能力者は変人ばかりなのかしら。

「よかつたのか?」

「……何が?」

「何がって、アーロンが来て以来、あんなに楽しそうにしてたお前は初めて見たぞ。それなのに……」

「いいのよ」

ため息ひとつ吐いて、立ち上がる。

「あの子には家族がいる。帰るべき家がある。こんな所にいつまでもいる訳にはいかないでしょ」

「ノジコ、お前……」

ゲンさんからの視線を振り切るように、あたしはその場を立ち去ろうと歩き出す。

「ノジコ、どこへ?」

「帰る」

なんだろう。胸がポツカリ空いたような気がする。

「らしくないわね、同居人が一人いなくなつただけで、こんな気分になるなんて」沈んだ気分のまま、帰宅すると、テーブルの上に一通の手紙が置いてあるのに気づいた。

これ、あいつが……？

封を切り、便箋を広げる。

『よう、もしかして寂しくて泣いてるう？ もう、ノジコちゃんつたらかわいいところもあるじゃ……』

グシャ

思わず手紙を握りつぶしてしまった。けど、あたしは悪くない。

「あれ？ もう一通……」

一通目の下にもう一通の手紙があるのに気づいた。

『おれの秘蔵のせんべえは二番目の棚にしまってあります。食べちゃつていいよ』

「もうちよつと他に書くことあるでしようが』

最後の最後まで相変わらずな元同居人に、思わず苦笑がこぼれる。

沈んでいたはずの気分は、いつの間にか元に戻っていた。

あいつがここで過ごしたのはほんの一週間だつたけど、もつと長い間一緒にいたような気がする。

突然現れて、魚人に追いかけられてるところを助けて……

なんか流れでウチに住むことになつて……

四六時中ボケ続けて、それにあたしがツッコんで……

ゲンさんや村のみんなをおちよくつて いるのをシバいて……

「よくよく思い出してみると、ほんどの時間、あいつに振り回されてたわね」

思えば、誰かと一緒に気兼ねなくご飯を食べたりしたのは、ベルメールさんが死んで以来だった。

こうして静かになつた家にいると、まるであの日々が幻のようだけど……確かにあいつはここにいた。

「あたしも楽しかつたよ、あんたと過ごした日々は……」

手紙を机の引き出しにしまい、収穫用の籠を持って外に出る。

「さて、今日も元気に仕事しますか！」

今度会つたときに辛氣くさい顔してたら、あいつに笑われちゃうしね。

同時刻、ゴーイング・メリーア号の甲板にて、

「これ、何かしら」

「あつ」

オレンジ髪の女によつてダンボールが取り扱われる。

バカなつ、かの有名な蛇男御用達のスニーキングアイテムがこうも簡単に!?
こやつ、できる……!

「あ、あああああんた!?」

「どうも、この度、麦わらの一昧の捕虜として乗船させていただきました。どうぞ、よろ
しくお願ひします」

おれたちの冒険はまだまだ続くつぜ!

第一章 One

どうも、主人公です。ただいま、麦わらの一味の船の上で尋問されています。

まったく、密航くらいで大袈裟な。

四方を麦わらの一昧一行に囲まれる中、一味内で唯一おれと面識のあるナミが話を切り出した。

「何であんたがこの船にいるのよ!？」

バン、と机を叩きながらナミが詰め寄つてくる。その表情には苛立ちがありありと見える。

ふむ、何て言おうか。適当でいいか。

「そんなの決まっているだろう。ナミ、君に会いたかつたからさ（ ； ）キリツ」「あんたねえ……」

「ナミさんに色目使つてんじやねえクソガキ！」

決め顔で事情を説明したところ、何故突然かぐるぐる眉毛の黒スース男が因縁つけて

きた。

すゞい剣幕だ。命は惜しいので、ここは素直に弁明しておくとしよう。

「まさか、天下のナミさんに向かつて色目なんて使うわけないじやないデスか」

「そうよ、サンジくん。こいつまだ10歳よ？ 今のは単に——」

「バカにしてんですよ」

「殴るわよあんた！」

「サー、セン」

たんこぶ作るのは嫌なので、謝罪する。

しかし、おれの謝罪がナミの気に障つたようで、結局殴られた。

おのれナミめ……貴様には後で海苔が歯にくつづいて離れなくなる呪いをかけてやる。

「なあ、お前、名前何て言うんだ？」

おれがナミへの復讐を考えていると、麦わら帽子の船長さんがおれの名を尋ねてきた。

ほほう、この私の名前が知りたいとな？

「そこまで言うのなら教えてやろう！ 我が名はフミ＝ダイ！ いずれ世に現れるであろうオリシユに蹂躪される運命を背負う者だ！」

「また変な名前を……。いい加減真面目に答えなさいよ」
呆れたように言うナミ。

確かに、今までおれは真面目に本名を名乗つたことはない。ナミが先のような発言をしたのも無理はないだろう。

だが、おれは今のナミの物言いに黙つていることはできなかつた。
「おい、ナミ。今のはおれに対する侮辱だぞ」

「え？」

「例え世間一般では変だとされるような名前でも、そいつにとつては親からもらつたつた一つの大切な名前なんだ。それを変だと嘲笑つて、恥ずかしくないのか」

「そ、それは……！」

「名前には一つ一つに意味が込められてんだ。それをバカにするのは、人として最低の行いだぞ……！」

「ごめん……。私が間違つてた。そうよね、少し変わつても、本人にとつては大切な——

「まあ、今回のも偽名なんだが」

「いい加減ぶつとばすわよ、あんた!!」

殴つてから言つても遅いです。拳を振りきつた状態で怒りを表すナミを白い目で見

つめる。もつとも……

「ナミよ、いつからおれを殴つたと錯覚していた?」

「え? キヤー、ウソツプ!?

「どうなつてやがる……」

「ああ、確かにナミさんの拳はあのガキの顔を捉えて——」

「おい、しつかりしろウソツプ! ナミ、お前なんて事を!」

「私のせいじやない、私のせいじやない!」

騒ぎの中心には、顔を陥没させた長鼻さんが倒れていた。

そう、ナミが殴つたのはおれではなく長鼻さんだつたのだ!

なんてひどい女だ。自分の仲間を腹いせに殴るとは……

おれは長鼻さんの元まで近づき、容態を見る。

つ、これはひどい……

「おい、しつかりせい工藤! アカン、手遅れや……もう、脈が……くつ、惜しい奴を亡

くしたで」

「いや死んでねえし、工藤つて誰だよ!」

「あ、復活した」

それならもう用済みだ。放置で。

「うおい！」

「ああ、そうそう。お土産持つてきただ」

無視するな、と騒ぐ長鼻さんをスルーしつつ、麦わらさんに一枚の紙を手渡す。
それを受け取った麦わらさんは、目を輝かせた。

「おい、どうしたんだよ」

他のクルーたちも気になつたのか、麦わらさんの持つ紙を覗き込んでくる。と同時に、目を見開いた。

「えっ」

「おいおい」

「こいつあ……」

「マジかよ!?」

みなさんその紙の内容に驚いてらつしやるご様子。

「そう、これはデッドオアアライブのお尋ね者の張り紙。つまり、麦わらさんは何と3千
万ベリーの賞金首になつたんだよ！」

「な、なんだつてー!？」

一斉に驚きの声をあげる麦わらさんたち一行。わりとノリいいですね。

Two

「改めまして、タダ・NO・コドモです。捕虜という名目でこの船に乗船させていただきました。短い間ですが、どうぞよろしくオナシャス」

「おう！ よろしくな、コドモ！」

「ちよい待てい！」

おれの自己紹介に対してにこやかに返してきた麦わらさんは、ナミと長鼻さんからのツツコミを食らっていた。

「明らかに無視しちゃなんねーとこがあんんだろうが！ 捕虜つてなんだ捕虜つて！」

「それにどう考えても今の名前も偽名に決まってるでしょうが！ 何がただの子供よ！

あんたほど変わった子供は世界中探してもいないっての！」

「？ こいつ、自分でコドモだって名乗つてたじやねえか」

「だからそれは嘘なの、う・そ！」

「何ー!? 嘘なのか!？」

うん、ナミたちがツツコんでくれて助かつた。麦わらさん、あんた純粋すぎだよ。心

が痛え……

「ナミさん、こいつ本当に何者なんだ？ ナミさんと知り合いみたいだが……」

「この状況を見かねたのか、ぐる眉さんが尋ねた。

「私にもよくわかんないのよ。わかつてるのは、こいつの頭がおかしいことと、少し前からノジコと一緒に暮らしてたらしいってことだけ」

「異議あり！ おれは頭おかしくなんかありません！」

「ぬああにいいい！ おのれクソガキ、ナミさんだけじゃ飽き足らず、お姉様まで手込めにしようつてか!?」

「聞いてよ」

おれの主張が無視されたばかりか、理不尽な怒りまで向けられ、おれの寿命がストレスでマツハ。

このままでは、余命幾ばくもないか。

ばあちゃん、今そこに行くぜ……つてばあちゃん死んでなかつたわ。

いかん、すでに思考がズレかけている。

自分の集中力のなさに戦慄した。

「少し黙つてろクソコツク。話が進まねえ」

「誰がクソコツクだこのマリモ野郎！」

売り言葉に買い言葉で即ケンカに発展するマリモさんとぐる眉さん。

目にも止まらぬ早さで抜刀し、切りかかるマリモさんに、ぐる眉さんも負けじと反撃。鋭い蹴りがマリモさんに襲いかかる。

二人の実力は伯仲しており、次第に激しさを増していく。

それでいて周囲には被害を与えていないのがすごい。

それにしても……

「ケンカするほど仲がいい、ですね。わかります」

「誰がこんなやつと！　って真似すんじゃねえ！」

二人揃って反論した。全く同じタイミングだ。

やつぱり仲いいじゃないですか。

*

その後、ナミの怒りが爆発し、場を（物理的に）収め、おれへの質問タイムに戻った。
「で、本当のところ、どうしてこの船に便乗してきたの？」

心底疲れた顔で、しかし、嘘は許さないといった目で問われた。
さすがに不憫に思えてきたので、正直に答えてやる。

「いや、そろそろ家に帰ろうかと思つてさ。知り合いの当てがあるローグタウンまで乗せてつてもらおうかと思つて」

「何で行き先がローグタウンだつて……ううん、偉大なる航路に入るにはどつちにしろ近くまで寄る予定の街だつたし、やろうと思えば予測はできるわね」

「いや、無理矢理にでも連れてつてもらうつもりだつたぞ？　お前らの予定とか知らんし」

「あんたは慎ましさつてものを学びなさい……！」

ナミの手がおれに向かつて伸びてくる。

「な、なにをするだあー！？」

「ふん！」

ナミのアイアンクロー！　こうかは　ばつぐんだ！

「痛いジャマイカ」

「全く痛そうに見えないのがムカつくんだけど……」

「てへぺろ」

「かわいくないからやめなさい」

失敬な！　おれのプリティーフエイスを侮辱するとは。

「おのれナミめ、許すまじ。貴様には後で、みかんの汁が目に入る呪いをかけてやる」

「やめいつ！」

拳骨が下つた。

痛かです。

Three

なんやかんやあつて、乗せてもらえる事になりました。ただし、乗船するからにはしつかり働いてもらうとナミから釘を刺された。

ふむ、乗せてもらつているという立場上、逆らうことはできない。

俺にできることといえば……

ティンと来た。

おれはメガホン片手に甲板に立つた。

「フハハハハ！　さあ下僕達よ！　我が手となり足となり働くがいい！」

「（自称）捕虜のくせして何ふんぞり返つてるのよあんたは！」

「やたら偉そうに指示を出すくせして自分は何もしないダメ上司のモノマネで場を和ませてみました」

「和むどころか苛立ちしか沸かんわ！」

キレたナミが後ろから拳を落としてきた。

いい加減こういった展開も慣れてきたので避けてみる。見事なスウェーで回避に成

功。

空振つた体勢のまま、プルプルと体を震わせるナミを鼻で笑つてみた。

「…………」

「ちよつ……待つ……やめ……!!」

癪に障つたのか無言でボコボコにされた。

*

「たん瘤できたでござる」

呆れた目でその様子を眺めていた長鼻さんに被害状況を報告する。

「おめえも懲りねえよな！」

「ナミで遊ぶのは最早日課なので」

「また殴られんぞ、おい」

「どこぞの業界ではご褒美だそうですよ。どう、興味ある？」

「心底関わりたくねえよ、そんな業界」

「残念。いい羊ができると思つたのに」

「生け贅にする気か!!」

いやー、いつ見ても長鼻さんのツッコミは惚れ惚れするね。キレが違うよ、キレが。

「どうか、本当にお前つて謎な存在だよな」

「ミステリアスな男はモテると聞いたもので」

「いや、妙ちきりんではあるがカツコよくはないぞ、決して」「なん……だと……？」

「いや、何でそんなショック受けた顔してんだよ」

「自分では美少年だと思っていたもので。けど、少なくとも長鼻さんよりはモテると断言できます。ふつ」

「喧嘩売つてんのかコラア！」

キレられそうなので素直に謝る。長鼻さんも子供相手にムキになるほどではないらしく、すぐに頭を冷やした。

「ところで、何でうちの船に……海賊船なんかに乗つたんだ？ 聞いた限りじや、海賊志望つて訳でもねえだろうに」

「いい暇潰しになりそだつたからですが、何か？」

馬鹿を見る目を向けられた。解せぬ。これは抗議せざるを得ない。

「いや、暇潰しのために海賊船に潜入するとか馬鹿以外やらねーだろ」

「元々暇潰しのために旅に出たので間違つてはいないとおれの灰色の脳細胞が告げてい

る

「間違いなく誤作動起こしてるので、お前の脳みそ」

結局見返すことはできなかつた。

「そういやおめー、ココヤシ村の住人じやねーんだよな。どこから來たんだ? やつぱりローグタウンか?」

「うんにゃ、聖地マリージョア」

「へー…………はあ!?!」

「嘘でござる」

「おい!」

「本当はマリンフォードです」

「どつちにしろヤベエよ!」

何をそんな大げさな。海軍本部がある町出身なことぐらい、大したことないでしよう
に。

「おいおいおい、何かヤベエの乗せちまつたんじやねえのか……?」

「気にしなくていいんじゃない? 麦わらさんだつて海軍の英雄とか呼ばれてるガープのじーさんの孫なんだし」

「そもそもつかあ……つて何だとお!?!」

「だからさらに別の海軍将校の孫が海賊船に乗つてたつて問題ないない」「今すぐこいつを船から降ろせー！ 危険だあー!!」

長鼻さんの絶叫が船上に木霊した。

Four

結局、おれのことはモブ太と呼ぶことになつたそな。これは初めてナミに会つた時に名乗つた偽名である。

さつき話した長鼻さんからおれの素性が一味に伝わつたのか、面倒事は避けた方がいいと判断したつぽい。できるだけ周りから存在を隠して、穩便にローグタウンまで送り届ける方針らしい。

なんか、一味の中の潜む謎の人物つぽくて厨二心をくすぐつてきやがるぜ。これは仮面にマントとかの素敵ファッショニの出番か!?

なんだか胸が熱くなつてきやがつたぜ。

悪目立ちしまくつて出番も増し増しだー！ 増し増しだー！

いや待て、俺はもう厨二は卒業したはずだ。

ふ、ふふ、俺自重ｗｗｗ俺自重しろｗｗｗ

……何て考へてる時点で厨二思考におかされてゐるのだが。

ま、細かいことは気にしない。今はこの得難い海賊船での航海という貴重な体験を楽しむとしよう。

「という訳で、麦わらの一昧が捕虜、モブ・モブ太の提供でお送りしております。

「おー、ぐる眉さんの料理めちゃうまし！　うーまーいーぞー！」

大事なことなので2回言いました。現在船室でディナータイム。
ぐる眉さんの料理が猛威を振るつております。うまうま。

「当たり前だクソガキ。おかわり食うか？」

「いただこう！」

(サンジくんが懐柔された……)

料理の素直な感想を告げたら、なんかぐる眉さんの雰囲気が柔らかくなつた。
テーブルの向かい側でナミが頭を抱えている。どうした、あいつ。生理か？
「あんた変なこと考えてない？」

「滅相もない」

真顔で否定する。

殴られずに済んだけどジト目で睨まれました。

なんとか誤魔化し、その後もうまい料理を堪能した。今はデザートの時間。
「うまうま。ふむ、ノジコの所にいた時から食つてたが、みかん美味し。こたつがあつた
らパーフェクト」

「何であんたが私のみかん食つてんのよ！」

「そこにみかんがあつたから」「登山家みたいなこと言うな！」

手を伸ばすナミから逃げ回る。まつたく、みかんくらいで大袈裟な。結局ぐる眉さんもグルになつて捕まえにかかつたので降参する。

持つてたみかんは没収された。

「まあ、すでに三個ほど腹の中に収まつているのだが」

「えく、ずりいーぞモブ太！ なんでおれにもくんなかつたんだよー！」

「だつて麦わらさん騒がしいし。ワシの完璧なスニーキングに支障が出る」

「おれも食いたかつたのに〜」

「まつたく、仕方ないなあ麦太くんは」

やれやれ、と麦わらさんにへそくりとして隠していたみかんを手渡す。

麦わらさんが目を輝かせて受け取る。

「没収」

「ああつ」「

食べる前にナミに回収された。

「おいナミ！ 横暴すぎるぞこれは！」

「そうだ、断固抗議する！」

麦わらさんと二人でブー垂れるが、ナミは取り合わない。

「あ、と一息吐いた後、振り返つて言つた。

「いい？ あんた達のものは私のもの。私のものは私なのよ！ 覚えておきなさい！」

「「「おい、ちょっと待て」」」

「冗談よ」

目が笑つてないのだが。なんというジャアイニズム。

「ナミ島さんたら、あんなこと言つてますわよ。どう思いますウソ川さん」

「ど一見ても目が本気でしたわよね、モブ田さん」

「まつたく、ナミ島さんたら油断も隙もあつたもんじやないわ。私たちを食い物にする気よ」

「皆様もお氣をつけあそばせ。骨の髓までしゃぶり尽くされるわよ」

「ナミ、いくらなんでも仲間を食うのはダメだぞ」

「そんなナミさんも素敵だあ！」

「アンタらあ……つ！」

おばはんトーグしてただけなのに拳で制圧された。

やはり貴様一度泉に落ちて綺麗なナミになつて帰つてこい。

「次嘗めた真似したら小遣い抜きだから」「「「」めんなさい」「」」

金の力は偉大だつた。

*

いや、待て。そもそも捕虜のおれには小遣いとか関係ないじやん！
ぐぬぬ……

おのれナミめ！ この闇夜に乗じてみかんを狩り尽くしてやる。
いざ、段ボールを用意し、ミッショング開始！

瞬間、段ボールの外側から衝撃が。
つ、バカな、動けん？

「ルフィ、ウソツプ、そのまま押さえてて」「ラジャー！」

「サンジくん、テープ。念のためロープも」「はい、ナミさん！」

「ちょつおま」

捕虜から箱入り息子にジョブ変しました。

「おのれ裏切り者共め！」

「悪いモブ太。小遣いの元締めには逆らえなかつたんだ」

「お前捕まえなきや、ナミが肉抜きつて言うからよお……」

「おれは元々ナミさんの恋の奴隸だ。観念しろクソガキ」

「くそ、謀られたかつ！」

「だが、これで終わりと思うなよ。いずれ第二、第三のおれが現れ——」

「倉庫に放り込んでおきなさい。明日には開けてあげるから」

「あー」

抵抗むなしく、倉庫に放置された。

*

翌朝。甲板でナミのみかんを頬張つていると、

「何で脱出してんのよ!?」

「第二のおれを呼び出してマリモさんに助けてもらつた」

マリモさん共々拳骨食らつた。

マリモさんは何で殴られたのか不思議そうだった。正直すまそ。
そして、数刻後、ようやくローグタウンが見えてきた。

Five

「で、ローグタウンが見えてきた訳だけど、アンタはこれからどうすんの？」

海賊王が処刑された町が見えてきたところで、ナミにこれから指針を尋ねられた。

ふむ、とりあえずは……

「海軍を頼で使つて家に帰る」

「冗談は抜きにして本当にどうするの？」

「え、冗談じやないけど」

「なんつー恐ろしい事しようとしてんのこのガキンちよは!?」

えー、ばあちゃんの名前出してお願ひすれば、大体の人は聞いてくれるんだけど。

「まあ、何はともあれ、色々お世話になりますた。あ、餞別はみかんいくつかもらえればそれでいいよ」

「あげないわよ。勝手に乗り込んだくせに本当に団々しいわね」

「まあ、モグモグ……もう勝手に……モグ……もらっちゃってるけど」「返せ！」

「はい」

剥いた皮を渡したらアッパー食らつた。

「ちゃんと返したというのに何が不満だと言うのだね？」

「不満しかないわ！」

「怒ると小皺が増えるぞ」

「うつさい！」

ナミの頭に角が生えたので、すたこらさつさと退散する。

「という訳で、ナミはもうちよつと謹み深さを身に付けてほしいと思うのですよ。あ、これうつめ」

「つまみ食いしてんじやねえクソガキイ！」

ぐる眉さんの踵落とし！

こうかは ばつぐんだ！

まつたく、ちよつと夕食の仕込みの一部を食べたぐらいで……

「ひどいわっ！ こんないたいけな美少年に暴力を振るうなんて……」

「気持ち悪いからその口調やめる。つまみ食いするなら、厨房から出ていけ」「何を言いますか。拙者はただ味見をしていただけでござるよ。うまうま」

「言つてる側から食つてんじやねえ！」

「変わり身の術」

「ぶへえつ!?」

「んな!? ルフィ!?!」

我輩同様つまみ食いしようと、こつそり皿に手を伸ばしていた麦わらさんを身代わりに、厨房脱出成功。

したのだが、結局すぐに捕まつて説教されたのであまり意味はなかつたです。まる「おら、もう島に着くんだ。降りる支度でもしてろ」

「支度も何も、着の身着のままなんですが」

「じゃあ大人しく海でも眺めてろ」

「もう見飽きたでござる」

何日も海の上にいて今さら何を見ろというのか。

「仕方ない、またナミで遊んでくるか」

「ナミさんを弄ぶだと！ 三枚におろしてやる、そこに直れクソガキ！」

何故かぐる眉さんの中で、おれはイタズラ小僧からチャラ男にクラスチエンジしているようだ。

言いがかりにも程があるのだが、つまみ食いの時の比じやないくらいの怒りを見せたので、トルネード土下座を披露してやった。

ものすごいドン引きされた。解せぬ。

*

そうこうしているうちに船は目的地へと到着。人目につかない海岸沿いに錨を下ろした。

「いやー、お世話になりました。このご恩は忘れるまで忘れません」

「いや、結局忘れるんじゃねえか」

さすが長鼻さん。ちゃんと拾ってくれた。これからもツツコミ道を極め続けてください。

「貸しにしておくわ。だから忘れるんじゃないわよ」

「わかった。いつか仇で返すよ」

「普通に返せ！」

本日最後の右ストレート。

この拳とも今日でおさらばかと思うと感慨深い。いや、それでもなかつた。痛いもんは痛いわ。

後でドアノブをさわると必ず静電気が走る呪いをかけておこう。

「これでつまみ食い犯が減ると思うとせいいせいするぜ」

「ぐる眉さんの料理が美味すぎるのがいけないと思うんだ」

「けつ」

「あれ？ もしかして照れてるう？ 男のツンデレなんて見苦しいだけだゾ☆」

「やつぱり三枚におろしてやろうかクソガキがあ!!」

「はいはい、ツンデレツンデレ。実はぐる眉さんの料理少しくすねてきたんだが、この分だとバレてなさそうだな。ごちになりまーす！」

「お前は色々と興味深かつた。一度手合させしてみたかったが、まだガキだしな。お前が成長するまで楽しみはとつておくことにする」

「ほほう、我に喧嘩で勝つつもりか？ 自慢じやないが、おれはカラスにも負ける程度の戦闘力しかないぞ」

「本当に自慢じやねえな。それマジかよ」

「能力なしならこんなもんです。」

「マリモさん、箱入り息子事件の時は、お世話になりました。お礼に感謝の舞を踊つてしまふよ。え、ノーサンキュー？」 そうですか、いらないですか。

「同感です（笑）」

「なあモブ太、お前も一緒に海賊やろーぜ！ お前すつげー面白えし、一緒に冒険すると

楽しそうだ！」

「ふむ、確かに麦わらさん達と過ごしたこの数日は楽しい日々でござつた。だが断る」「ええ——？」

「ほらルフィ、断られたんだから、潔く諦めなさい。というかこんな奴を仲間に入れたら、胃がやられそうだわ」

麦わらさんはまだ渋っていたが、ナミに諭されて諦めてくれたようだ。

「それじや、お世話になりますた。お互い死んでなかつたらまた会いまつしよい！」

「縁起でもないこと言うな！」

こうしておれは麦わらの一味の捕虜を卒業し、モブの一人へと生まれ変わりましたとき。

Six

モブ太は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の大佐を除かなければならぬと決意した。モブ太には軍規はわからぬ。モブ太は、齡十歳の子供である。ホラを吹き、将校をおちよくなつて暮らして來た。けれども正論に対しては、人一倍に敏感であつた。

「野郎、おれを置いていきやがつた」

数時間前――

街行く人に話を聞き、この街に海軍本部から來た大佐がいるという情報を手に入れたおれは、すわ3分間待つてくれる大佐か、雨の日無能な大佐かと（0。・▽・）wkt kしながら支部の扉を叩いた。

出てきたのは、ただのヘビースモーカーだつた。

「何だその目は？　というか、何でお前がここにいる？」

期待外れの展開にやれやれだぜ、と呴けば、奴のアイアンクローが我輩の顔面を陥沒させた。

相変わらず容赦がない。おれの財布の中身もない。

「しようがない。ケムリンで我慢してやるから、家まで送つて」

「自分で帰れ」

首根っこ掴まれて外へポイされた。

これは抗議せざるを得ない。

「うわーん！ 海軍本部大佐のスマーカーにセクハラされたよー！ まさかあの人に
ショタ趣味があつたなん——」

「わかつた！ わかつたから今すぐ口を閉じろオ！」
快く中へ入れてもらいました。

「で、何でお前がここにいる？」

「本部で拳骨じーさんの船に潜入したら成り行きで」

「相変わらず口クなことしねえな、お前」

「それほどでもある」

「誉めてねえよ」

ケムリンのホワイトブロー！

こうかは ばつぐんだ！

「民間人に暴力振るうなんて、いーけないんだ、いけないんだ。ばーちゃんに言つてやろ

！」

「お前のそれは洒落にならないからやめろください」

さすがのケムリン大佐もばーちゃんには逆らえない。まあ本気でチクるつもりもないでの、話を進める。

「まあ、そういう訳だからおれのアツシーになつてよ」

「言い方が気に食わねえが……お前をここに置いとく方がダメージでかそだからな。折よく、数日後に本部からの視察船が来る。それに乗つて帰れ」

「え、何言つてんの。ケムリンが送つてくれればいいじゃん。バカなの?」

「調子に乗るなよクソガキがあ……!!」

「ごめんらはい」

ワイのほっぺたをむんずと掴むスマーカー。

額に浮き出た青筋がビキビキ言つてなんか面倒くさうなので、素直に謝りました。

「それにしても数日後か……暇だな。ドジっ子曹長さんでもからかつてくるか」「やめてやれ。お前に会う度あいつのメンタルが削れて使い物にならなくなる」「ふむ。おれのあまりのイケメンさにドキドキしそぎてしまつたのかな?」

「はっ」

「絶許」

鼻で笑つたスマーカーがムカついたので、奴の予備の煙草に水をぶつかけてやつた。

拳骨が下つた。

「スマーカー大佐！ 大変です、死刑台の広場で海賊達が騒ぎを！」

「海賊だと？」

そうこうしてスマーカーをからかっている内に、海兵の人人がやつて来て緊急事態を報告してきた。

「よし、全軍を広場に向かわせるのじゃ！」

「え、ええ……？」

「勝手に指示すんなバカ。一等部隊を港へ向かわせろ。二等部隊は通りから広場を隠密包囲。残りは広場の射程距離で待機」

「そして広場の中心でぬるぼと叫ぶ！」

スマーカーにガツされた。

「こいつの言葉は無視しろ。それより早く、今言った指示を各部隊に伝えろ」

「は、はい！ ところで、この子供は……」

「この人の隠し子です」

「ええつ!?」

「ふざけるな！ 下らねえ冗談はやめろ！ おい、こいつの言うことは一切耳に入れるな。早く行け！」

「わ、分かりました」

スモーカーに急かされて、海兵の人は走つて行つてしまつた。

「それじやあ、おれも広場に向かうとしますね」「逃がすか」

「ぐえつ」

さらつと離脱しようとしたが、首根っこ捕まれて動けない。

H A ☆ N A ☆ S E !

「てめえはおれの側を離れるな」

「え、もしかして口説いてるんですか？　すみません。おれにそつちの趣味はないんで

男の人はマジ勘弁」

「誰がお前なんざ口説くか！　野放しにしておくと何やらかすか分からねえから勝手に動くなつづってんだよ！　本部で何回やらかしたことか！」

「ついカツとなつてやつた。今は反省している」

「黙れ」

「はい」

そのままスモーカーについて歩き、途中でドジ子さんも合流。そして広場に面したホーテルに到着し、待機してた海兵さん達から話を聞きつつ、ベランダから外の様子を窺う。なんとそこには、処刑台の上で拘束されている麦わらさんの姿が！

おお、なんかヤバそうな状況。助けたほうがいいんかな？
と、そんな時にまた浮かび上がる予知じみたイメージ。

「雷様が降つてくる」

「あ、何か言つたか？」

「何か」

「やつぱてめえは黙つてろ」

「律儀に答えてやつたのになんて理不尽な。ハゲろ」

「てめえがハゲろ」

スモーカーと殴り合う。

負けた。

「紙一重か」

「ずいぶんと厚い紙一重があるもんだな」

「あー、あー、聞こえなーい」

ケムリヤローが何か言つてるが聞こえないなー。

それよりも麦わらさん、ヘソ取られないといいけど。つて心配するところ違うか。

とにかく麦わらさんは放置しても問題ないようなので、ナミからパクつたミカンでも

食べてまつたりしよう。

うまうま

で、油断してたらあつという間に事態が進んでしまい、置いてけぼりを食らった。雷が落ちたりと、なんやかんやで助かつた麦わらさん達が広場から脱出に成功、スマーカーもそれを追うために動き出した。

しかし、雨の日でも能力の使える大佐の必死の追跡むなしく、結局邪魔が入ったとかで出航を許してしまつたらしい。自分の管轄を無視して麦わらさんを追おうとしていたので、これ幸いとスマーカーの船に乗り込もうとしたのだが、海賊追うのに子供を連れていいけるか、と置き去りにされた。

そして今、荒れた大海原を前に港で立ち尽くす現状に至る。

「くそつ、こんな台風じやコロツケ食うしかねえじやねえか」

仕方ないので駐屯地に戻つてコロツケ食べる。うまし。

しかし、このままじや（お腹は膨らんだが）腹が収まらないので、海の向こうのスマーカーに向けて、しゃつくりが止まらなくなる呪いをかけてやろう。

とはいえ、置き去りにされた事実は変わらぬ。

まったく煙ヤローめ、自分はルール破りまくる不良の癖に、こんな時だけ子供扱いして正論持ち出しやがつて。

ぐぬぬぬぬ……

だが、ワシは理に縛られぬ男！ 正論という名の暴力には屈しない！
ここで取り出したるは、海軍本部直通の電伝虫！ そして、とある中将の連絡先を打ち込む！

「という訳で権力行使つと。あ、ばーちゃん？ ローグタウンでスマーカーに置き去りにされたから家帰るの遅れるわ。んじや、またねー」
ガチャリ。これでよし！

それじゃあ、一息ついたら海王タクシーでも使って帰るとするか。